里見犬傳
さとみぞうけんでん

八犬傳

僕甚麼なる過世ゆゑけん。那八犬士に因深く當初婦女賢誌に毫を採そめてより。仮名読及後日譚を綴り。又銘々誌を編ふに今又這書を編述なせば既にしらく原傳より。引出せる冊子五種におよべり。恁まで犬士に縁いあれど余に牡丹の痣もあらざれば玉もなされば疵もなく。世の笑覧を蒙る事偉にいふ人の禪ぐ相撲を取るに似たれども开はこゝあるにも、いつるべきか。尓ば這書の基くしたるから當時世にもてはやさるゝ。那俤を写せしあれども其仮にあらく紙筆に述ぶれば事理の通ぜぬ事りやのたんと思ふが例の戯作者だましい。怯れまづら甲しと新に筆を加えて八士里見に仕ゆるまでを短き文に書ふりたれば。編數も又長からずとして。原本のおもむきをも當時のさまをも知らしむる早手ゆゑしの新板は外題に所謂八房の梅咲く春を賣出しの。書房が市の魁策子買人の山に殊の外込合は事ゆゑとも御老人さま御女中さまも跡よりそろく御覧なされば出ことに一番がけに御贔屓厚れ御評判を隅から隅まで願ふにあらん

嘉永五歳子如月新鐫

爲永春水記

藍原夢之助

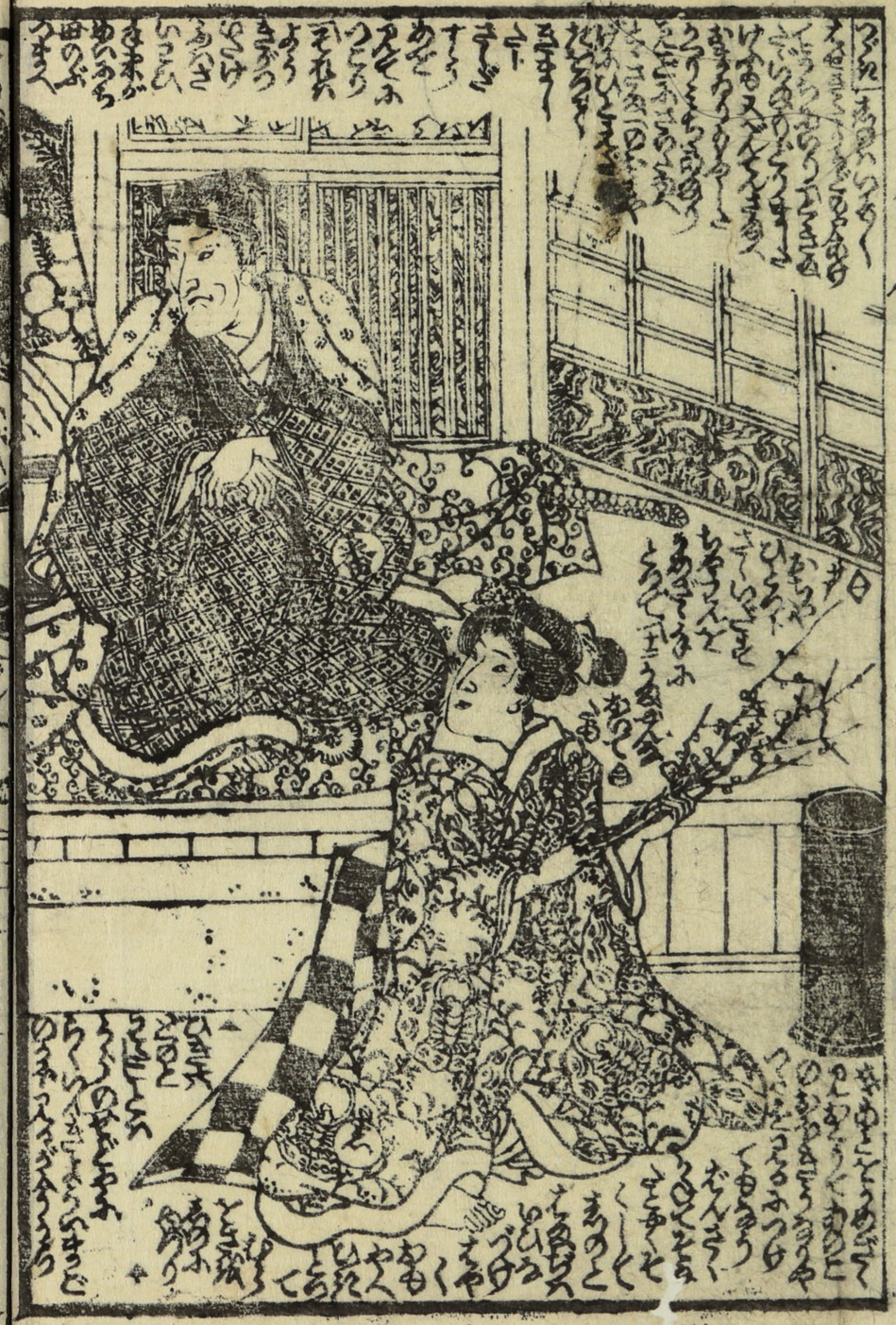
上語路五郎
高成

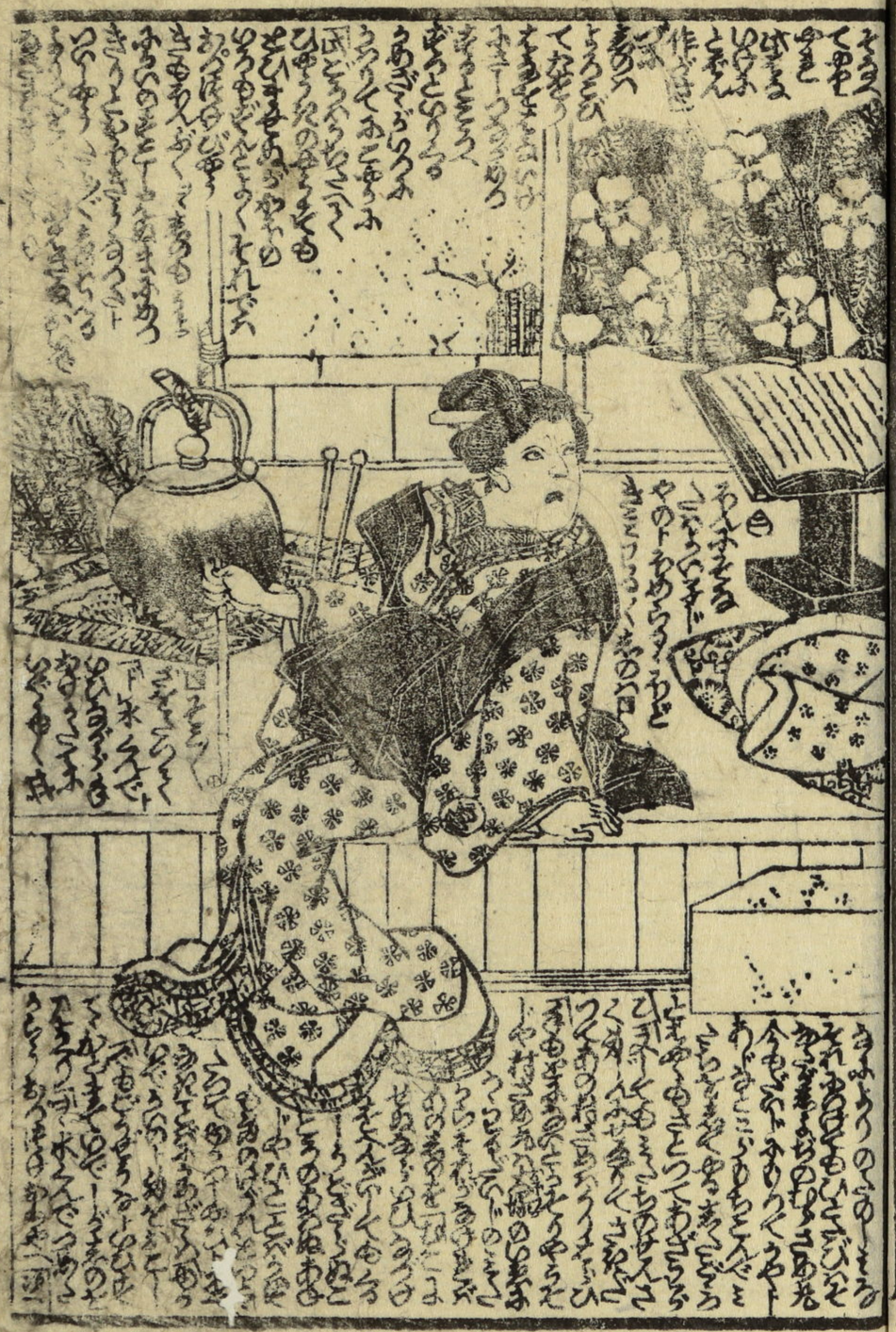
犬村大角

犬江親兵衛

宮

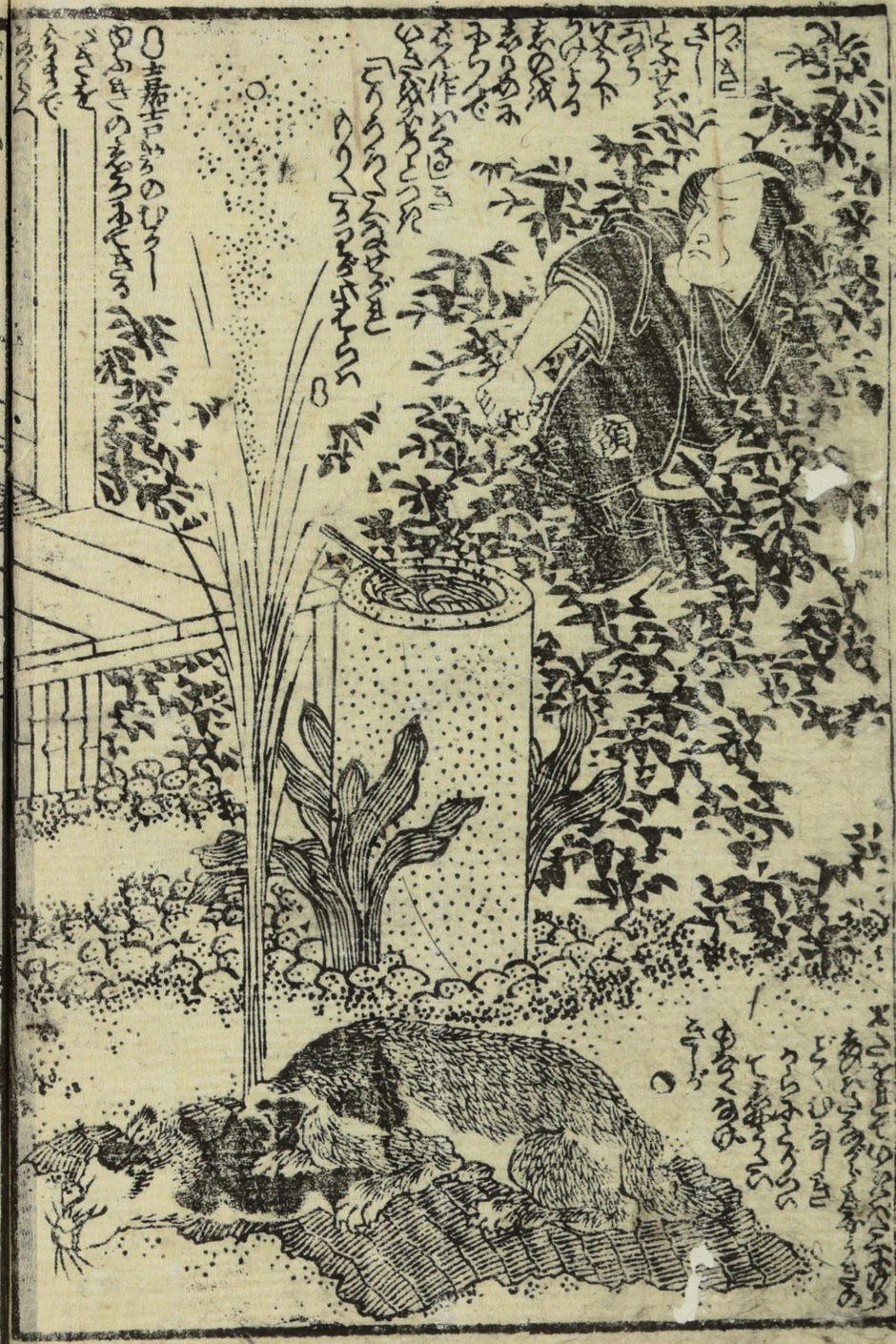
五

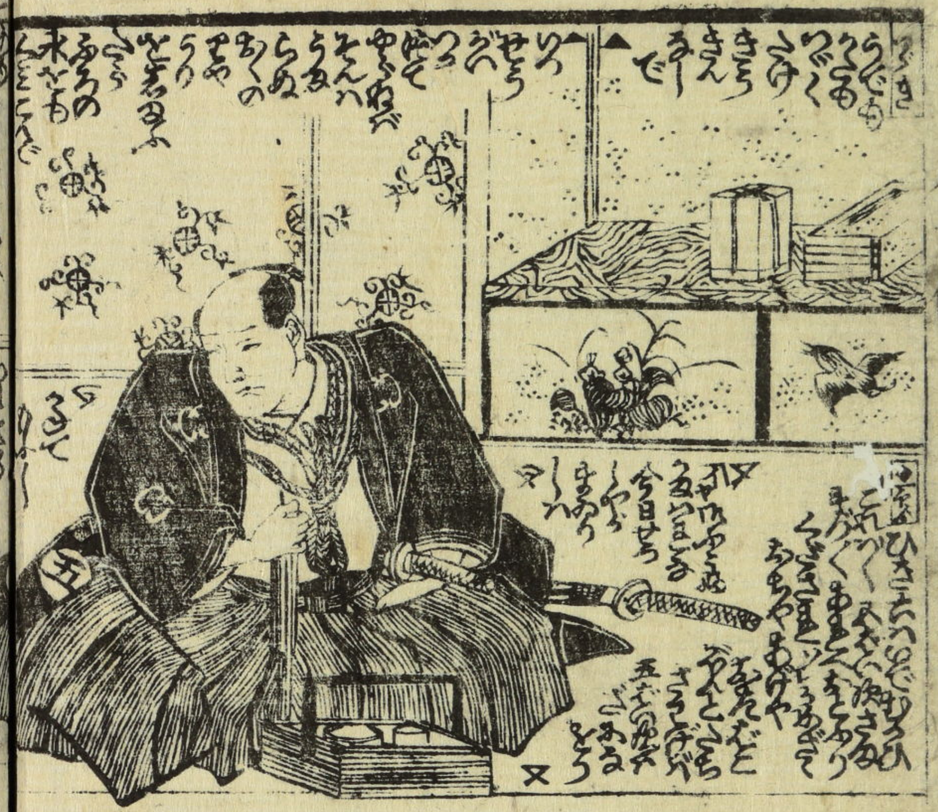




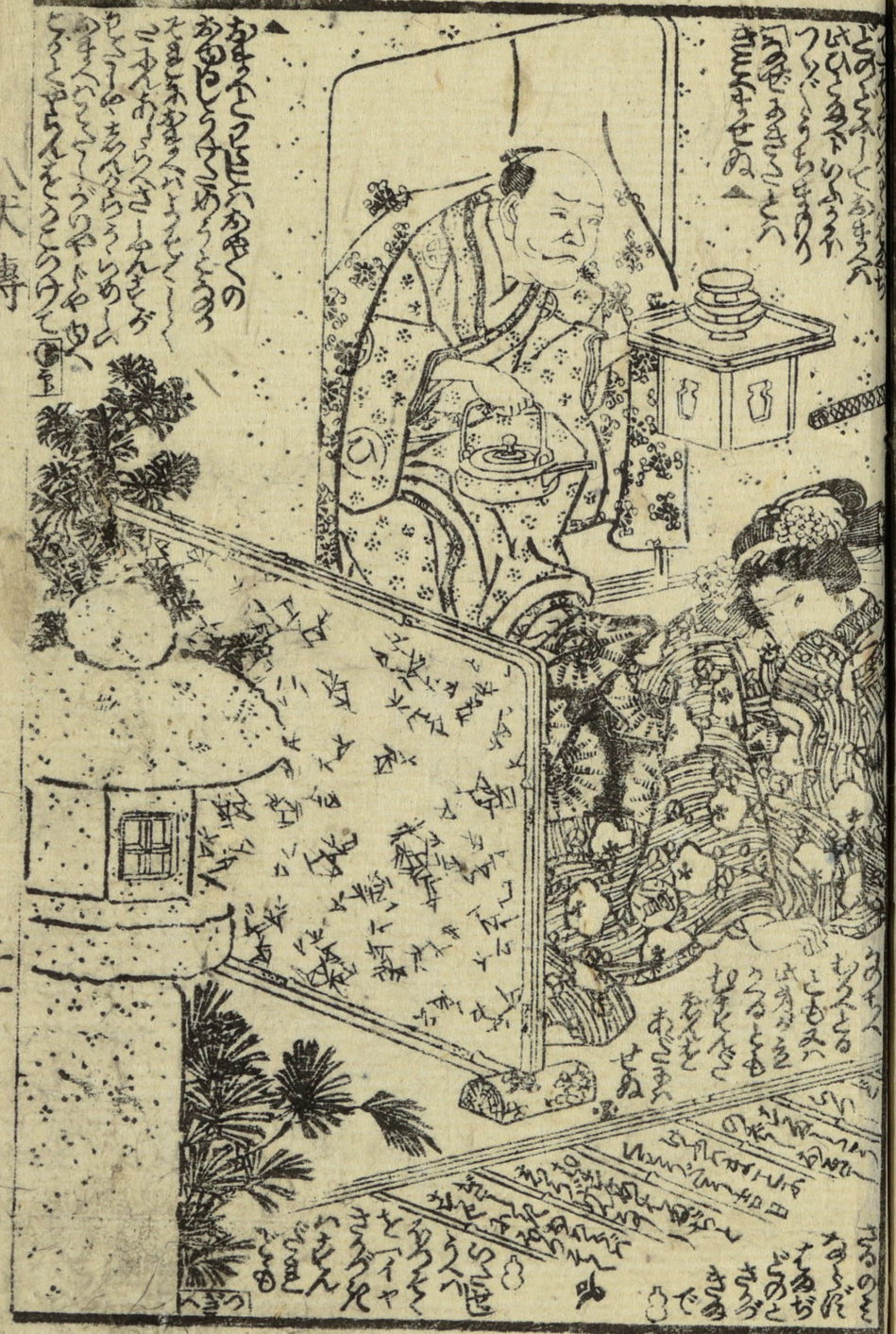
國芳画
春水作

八犬傳





氷



爲永春水作

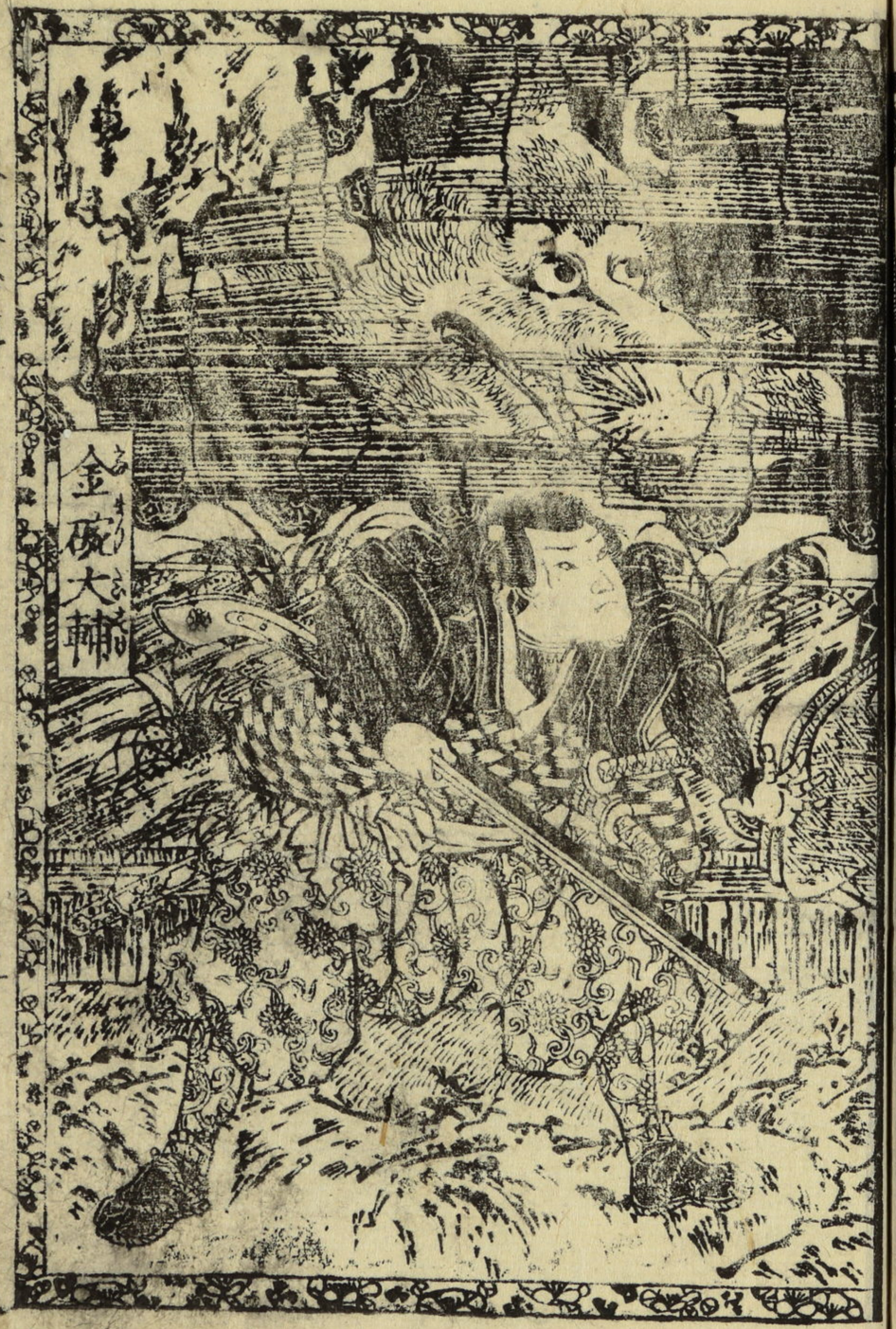
一勇齋國芳画

朝鮮 牛肉丸 一包 百銅
一ひねをとてのみん
せんをまもめう茶
下谷さこせんぢり
製所 深崎氏

熟當時のありさまを観るに物とする
迅きを手柄とせられば歳に
一度のヒヌまつりも六日の
旦の露をむまびて短冊
五紙もそれぞれあるを
吾の夜より笹に結ひはけ二度の
月見ののしくも夜明ねうちにまつ
めだ歯隣贈るを勝とせるとなれば
小が合巻とあげ冊子も来年の新板をこしての教ふ
賣出しの魁いとぐもむべあるべし夫さえなるに這菓子は織作りの夜酒甘の
辛いう再考を加ふる間もなく彫あげて又おかりのお茶を安詣合に筆ハ様なれども三國一
儲なれて釜さえ光らね秋賣の醴さで於ける福に舐させて楽がこれを見んのことなり

壬子仲春新局

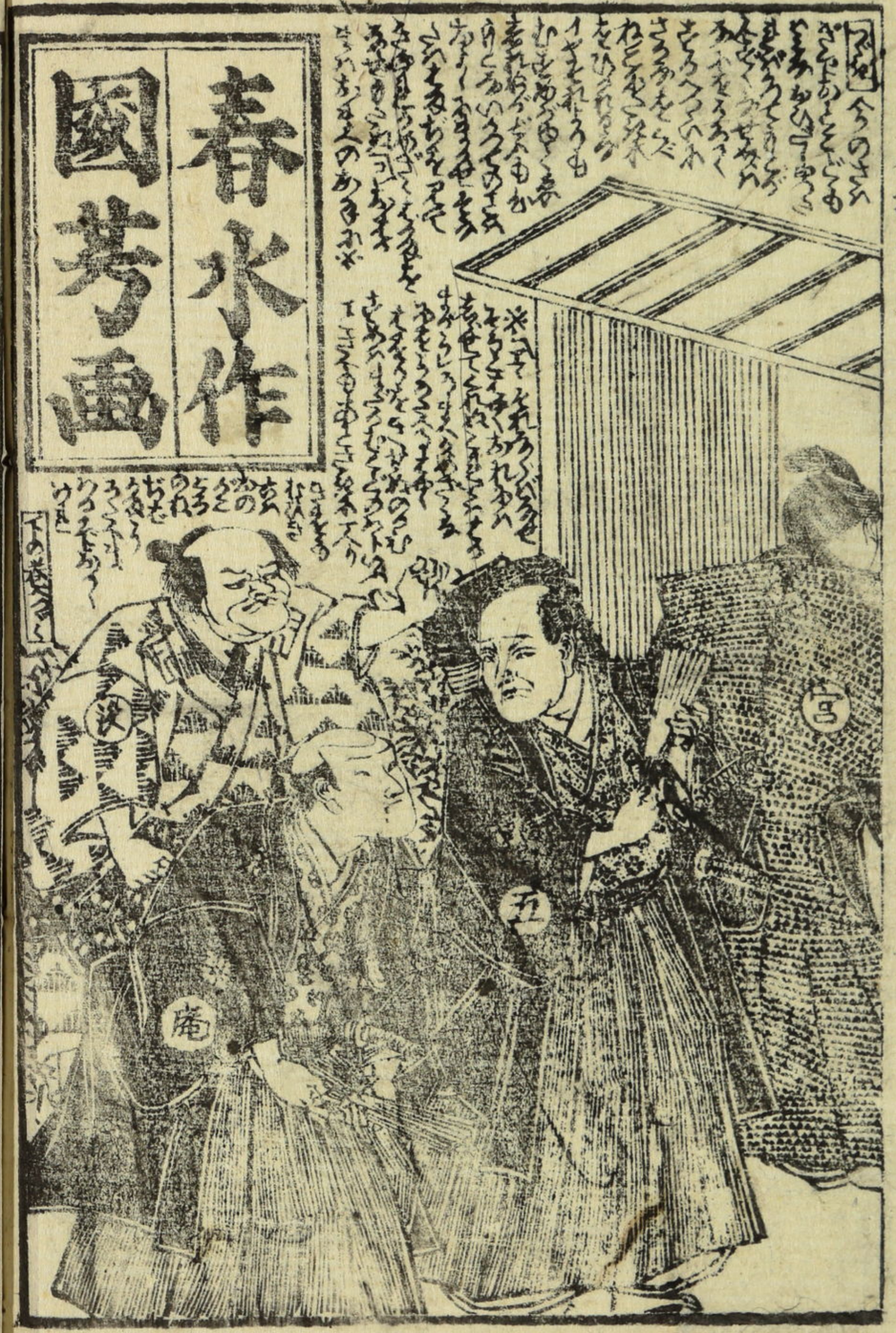
春水誌


金碗大輔

里見伏姫

つゞき
あるく
ごまを
あきなれて
うんだぜひ
もるのトいひつく
又のやるまいづ
わがあまをましたりと
うめざくが「それなら
そなるべいとくさ夜のよの
あとかれまさがふとりコレ
ひきうくどのきりしぬせ
ちまぢかとくしんまさとのまー
いふふひきろくものぞをあさめ
「むきあがとくしんせちろうへ
せをけれまくこのことを
つゞく

春水作
國芳画



亀
五
ひ

庵
宮

火神祠

左

道

爲永春水作
勇
道
浄書
草鳥